

10歳の男児に発症した脊髄 epidermoid cyst の1例

柴山元英 太田弘敏 高橋育太郎
門司貴文 松本佳久
豊川市民病院整形外科

Key words: 表皮様嚢腫 (Epidermoid cyst), 小児 (Child), 脊髄腫瘍 (Spinal cord tumor)

はじめに

脊髄腫瘍の中で, epidermoid cyst は稀である。今回我々は, 10歳の男児に発症した本疾患の1例を経験したので報告する。

症 例

10歳, 男児。

主 訴: 両大腿痛。

既往歴, 家族歴: 特記すべきことはない。

現病歴: 平成14年6月10日, バスケットボール中に, 人とぶつかってから, 右大腿痛が出現し, 徐々に左大腿にも拡がった。同年7月23日, 当科を紹介され受診した。

現 症: 両大腿部痛を訴え, 脊柱は前屈, 側弯位をとっていた。皮膚には異常所見はなく, 筋力低下, 知覚異常, 膀胱直腸障害などの神経症状は認められなかった。また, 下肢深部腱反射は正常であった。

血液, 生化学検査では, 異常はみられなかった。

画像所見: 脊椎の単純 X 線像では, 側弯を呈しているが, 骨破壊像はなかった (図1)。MRI では, 第12胸椎から第1腰椎にかけて T1W low, T2W high, Gd で周囲がエンハンスされた腫瘍陰影を呈した (図2)。

経過: 自己血貯血後, 8月29日に, 富田らの報告による環納式椎弓形成術を用いて手術を行った。第11胸椎から第2腰椎の4椎弓を1塊として切除後, 4×1×1 cm の硬膜内髄外腫瘍を摘出した後, 椎弓を環納して吸収糸で縫合固定した。

病理組織学的診断: 中央に扁平上皮とケラチン用組織を認め, epidermoid cyst と診断した。なお, 皮膚付属器官は認めなかった (図3)。

術後経過: 手術後, 痛みは消失した。2週間の体幹ギブス後, フレームコルセットを着用して退院

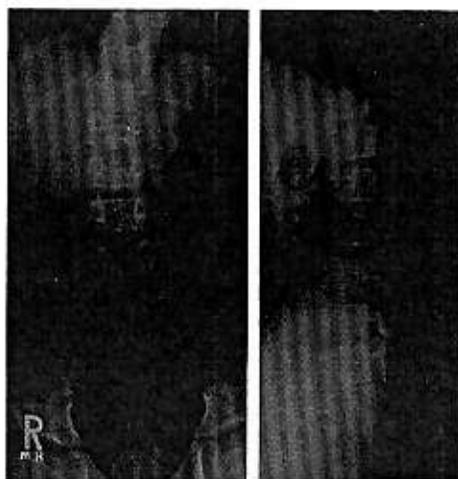


図1. 初診時単純 X 線像。

した。術後1か月の X 線像では, 側弯は消失したが, 骨切り線は確認できた。4か月の X 線像では, 骨切り線は見えなくなり, 術後6か月の CT で付癒合を確認した。

最終診察時の18か月後の X 線像で, 脊柱の変形はなく, また, MRI でも腫瘍の再発は認めない。

考 察

Epidermoid cyst は, 脊髄腫瘍の1~2%と報告されている¹⁾。

本症の成因には, (1) 胎生期3~5週に外胚葉が神経管内に迷入する先天性のもの, (2) 腰椎穿刺での皮膚上皮の迷入による医原性, 後天性 (Choremis ら²⁾) のもの, の2つがある。

先天性のものは胸椎に多く, 先天性皮膚瘻, 二分脊椎, 色素性母斑などが合併することが多く, 硬膜内髄外腫瘍が多いが, 時に髄内腫瘍もある。後天性では, 腰椎穿刺部の腰椎椎間レベルに多く,